大切な人の闘病に「寄り添いたい」と願うのは当然でしょう。その病気が不治の病であればなおさらですね。

私は今までの通信ではがん患者本人としての生き方にフォーカスして、どうしたらがんにならないのか？治るのか？そもそもがんとは何か？などを縷々お話してきましたが、今回はそのがん患者へのサポートについて一緒に考えてみたいと思います。

大切な人ががんを告知され、そのサポートをする場合、大切であればあるほど皮肉にもサポートに限界がある事が分かってきました。

サポートの限界とは超える事の出来ない壁の事です。しかし、在宅医療で関わらせて頂いたＫくんを介護する母親の姿から、限界があるからこそ、その限界を超えることができることも教えてもらいました。

限界を超えるとはどういう事か？どうしたらできるのか？

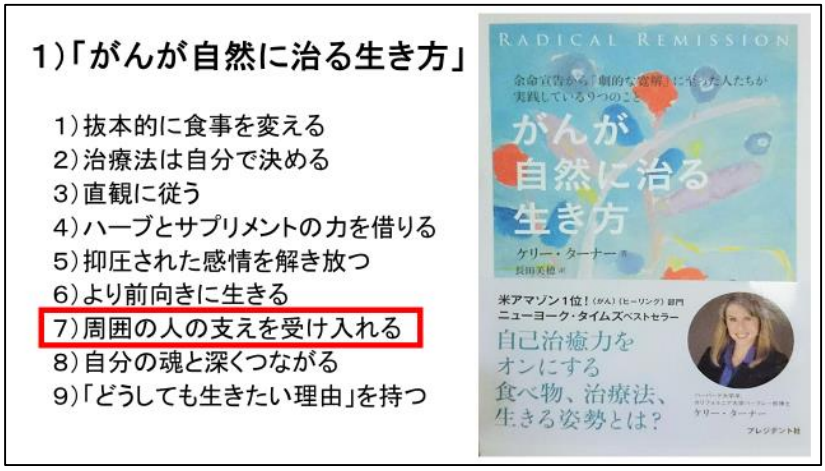
今年は、年の初めにがん患者に寄り添う側（サポーター）の在り方を一緒に考えて行きたく思います。

今回はＰａｒｔ１として、一番多いであろう「家族の寄り添い方」にフォーカスしてみました。そして、次回Ｐａｒｔ２では「友や仲間」そして「医療者」の場合での寄り添い方について考えてみようと思います。

（本内容は、過日２０１９年１１月に中部ホリステックシンポジウム、がんのホリステックアプローチ会にてお話した内容がメインです）

「周囲の人の支え」とは何か？

皆様ご存じのケリー・ターナーさんの「がんが自然に治る生き方」の９つのことに、左図の７）「周囲の人の支えを受け入れる」という項目があります。「自然に治る生き方」にこの項目がある事は非常に興味深いですね。７）の表記を裏返してみるとよく分かります。



裏返すと「周囲の人の支えを受け入れない人は、がんが自然にできる生き方ですよ」と言っているのではないでしょうか。

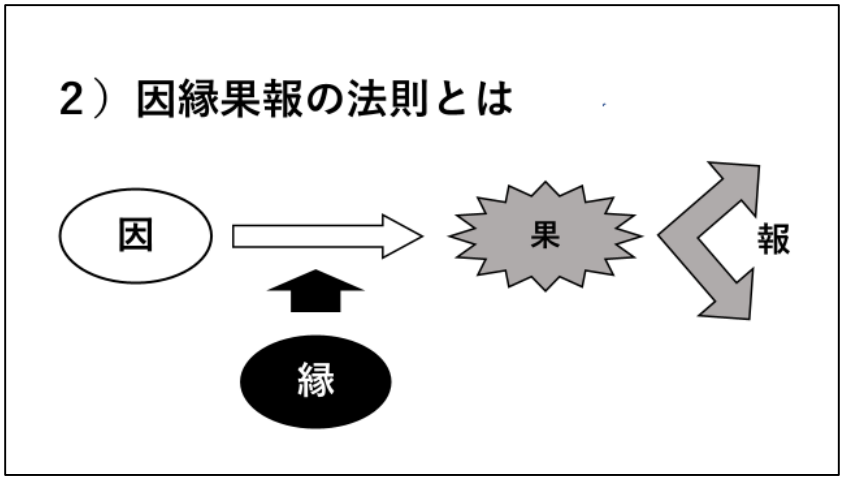
ではなぜ「周囲の人の支えを受け入れない」とがんになるのでしょうか？これは、今までの通信バックナンバーで再三申し上げてきたように、がんの原因は「悪」ではなく「無理」であり、他人に心配をかけたくない（支えを受け入れたくない）からに他なりません。

ケリー・ターナーさんは、「違うよ！我慢して頑張るのは止めなさい。もっと周囲の人の支えに甘えなさい。それは延いては身体の無理を減らすことになり、その結果、あなたは元気になり、あなたの元気こそが周囲のためになるのだから」と言っていると私は思うのです。

そもそもがん患者は「我慢して頑張りすぎの頑固者（３Ｇ）だと再三申し上げてきました。しかし、この性格はそれほど容易に変わらないし、実は変えなくて良いのです。ただ、生活（生き方）を変える。つまり、つらい、苦しいと思ったら、従来なら「迷惑をかけたくない」から頑張ったのですが、もうそれを止めて「たすけて！」って言ってしまう。これが「周囲の支えを引き受ける」という事です。そして、心から「ありがとう」って言えばよいのです。実は、これが「がんの言い分」だったりするのです。

今回は、その患者を支える立場（家族）から、ではどう支えるのか？という事を見てゆきましょう。

因縁果報の法則とは



まず、がん患者と周囲（家族、友、仲間）とはどういう関係になっているのでしょうか。

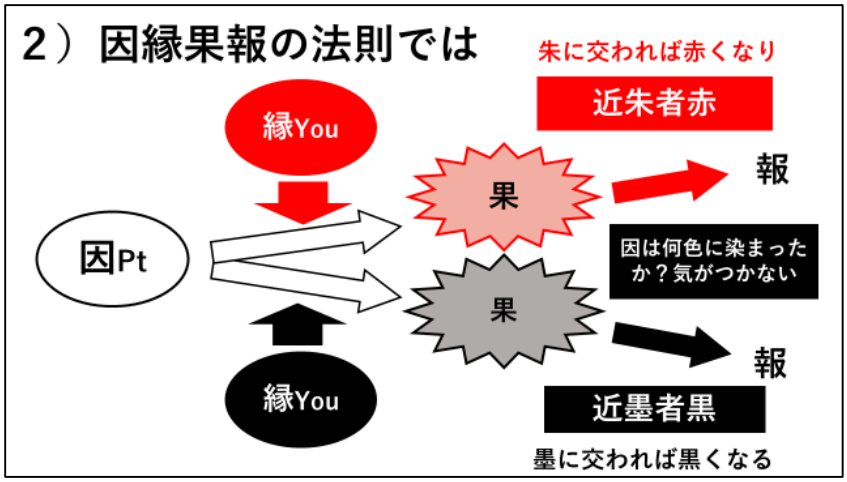
宇宙は「因縁果報」の法則に従うと仏教では教えています。これに当てはめると、がん患者は「因」になります。そして、支える周囲（家族や友）が「縁」になります。そして、発がんの原因の一つが、「周囲の支えを受け入れない」とは、どういうことなのでしょう。

あなた**（因）**が周囲の人**（縁）**のサポートを拒否した（忠告を無視、手助けを断るなど）としましょう。その結果、寝る間も惜しんで（不眠習慣）ファストフードで食を終え（ぞんざいな食習慣）、心も身体も冷えて（冷え冷え習慣）身体を動かさず（運動不足習慣）ＰＣとにらめっこ。楽しくないから笑顔もない（笑わず習慣）。しかし、お金のため、家族のため、生きるためには仕方ないと３Ｇ（我慢して、頑張って、これでいいと頑固に）で生きてきたとします。この生き方こそ、免疫を削ぐ生き方であり、当然その結**「果」、**がんが登場します。

がんを切り取ったからもう大丈夫と、また同じ生活に戻る人もいます。するとまたがんが出てくる（再発）？という展開もあるでしょう。一方手術後に勇気をもって周囲の人の支えを受け入れて、そして「良眠」「良食」「加温」「運動」「笑い」ある生活に努め習慣化すれば、免疫力が下がらないのでがんは再発せず治癒するかもしれません。がんが発生したという結果をどう受け止め、その後にどうつなげるかで人生展開は大きく変わりますね。これを**「報」**と言います。

以上は一例ですが、周囲の人の支え（縁）が大きく因に影響することが分かりますね。縁としての支え方は因の運命を左右しかねない・・・のではなく、運命を握っていると言えるほどですね。縁となるあなたの関わり方がとても重要だと言う事です。

近朱者赤　近墨者黒とは



この図は、あなたが赤い縁として白い因に関われば、因はどんどん赤に染まってゆき、同じように、あなたが黒い縁として因に関われば、白い因はどんどん黒く染まってゆくという事ですね。

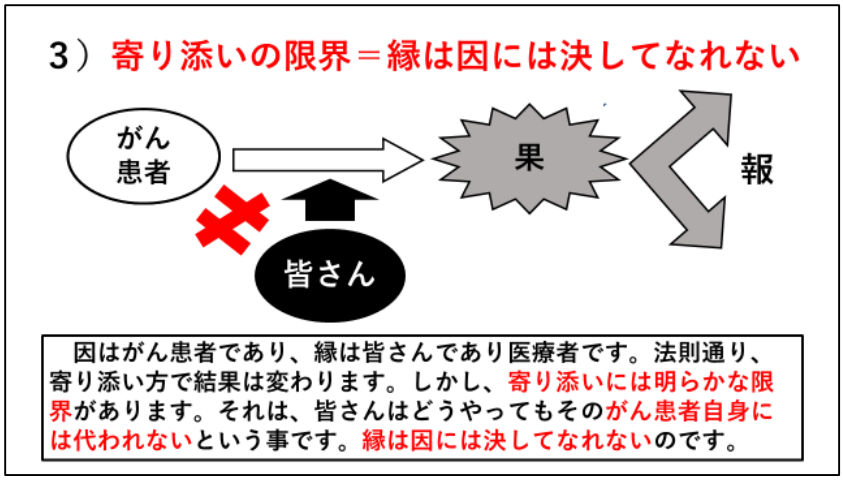
現在、２人に１人ががんになる（正確には、２人に１人しかがんが治せない）時代だと言われます。これは見ようによっては、もう片方の１人はがんにならない（治っている）のです。まさにこの図の如く、例えばがんになった（黒）とならなかった（赤）との違いは、ひとえに因と縁の関係だけです。だから因縁が人生を創っているんですね。

この縁の中には、人物以外も出会った治療法やテラピー、食事法、思考法から環境まで、さまざまな要因が含まれますが、人や方法を選ぶのは自分なので、やはり最終的には自己責任であると言えます。

しかし、ご安心ください。人生とはこうした選択のすべてですが、実は間違った選択（失敗）などありません。あなたの価値観で不都合な結果の時に「失敗」と思っていますが、本当の失敗とは、間違ったと思ってもその生き方を頑なに変えない事だそうです。つまり、「しまった、こちらは失敗だった」と分かった時点で生き方を転換して選び直しをしたら良いのです。そうすれば、失敗なんて存在しないどころか、その実体験からより人生を深める事が出来ますね。その生き方の途上でたとえがんが出てきても、そこで立ち止まり反省して生き方を変えれば良いのです。

きっと、その失敗のお陰で自分は成長できたと喜びに変わる事でしょう。これこそ人生の目的でもあると私は思っています。

寄り添いの限界とは



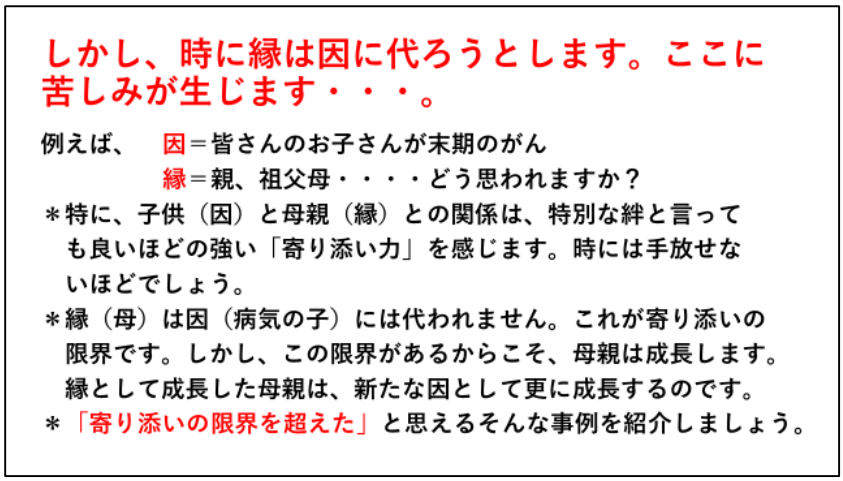
さて、話を因と縁に戻しましょう。

皆さんが縁として関わる時ですが、その人（因）が大切であればあるほど必ず突き当たる限界があります。

それは、縁は決して因にはなれないという事です。医療の世界で言えば、因であるがん患者には縁である家族は代われないという事です。因である、その人の病気（がん）は、その人の問題であり、縁である家族はどれだけ願っても、その病気を代わることは出来ません。

因は最後まで、その病気を自分の事として生きて行かなくてはなりません。これもまた、厳然とした法則です。

その人の人生を決して何人も侵すことは出来ないのです。



しかし、時に縁は因に代ろうとします。例えば、皆さんのお子さんががんになれば、その親や祖父母はどう思われるでしょうか？特に、子（因）に対する母親（縁）は特別な絆と言っても良いほど強い母親の「寄り添い力」を感じます。自分の命を削ってでも子供を救いたいという強烈な願いですが、当然かもしれません。しかし、重要なことは母親（縁）は因である病気のわが子に代る事は決してできません。

これこそ、寄り添いの限界です。縁は因にはなれないのです。

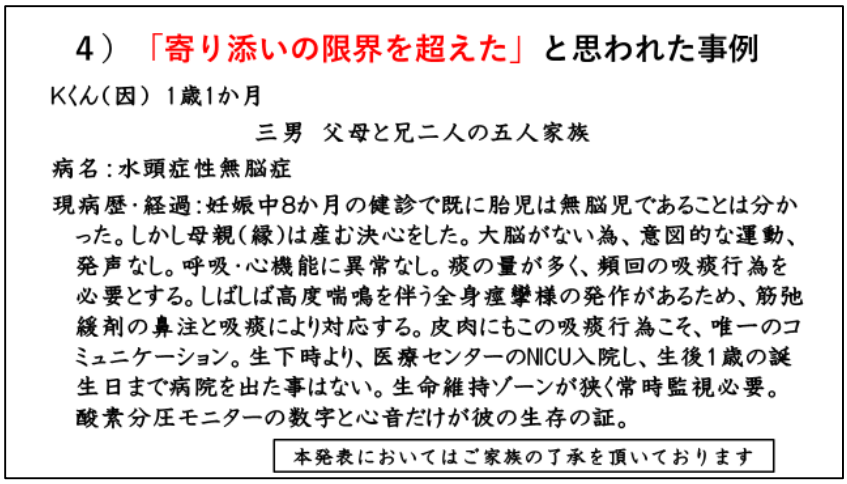
寄り添いの限界を超える

しかし、私はこの限界があるからこそ、縁である母親が以前にもましてより成長される姿を見せてもらいました。

それは、まさに「寄り添いの限界を超えた」と思えた事例でした。

もう１０年ほど前になりますが、その事例をご紹介しましょう。

（詳細はフナクリ通信２０１０年９月号参照「本当に大切なもの～天使になったＫくん～」をご覧ください）　https://funacli.jp/wp/collumn/number/2010/100901.html


4）「寄り添いの限界を超えた」と思われた事例

Kくん（因）1歳1か月

三男　父母と兄二人の五人家族

病名：水頭症性無脳症

現病歴・経過：妊娠中8か月の健診で既に胎児は無脳児であることは分かった。しかし母親（縁）は産む決心をした。大脳がない為、意図的な運動、発声なし。呼吸・心機能に異常なし。痰の量が多く、頻回の吸痰行為を必要とする。しばしば高度喘鳴を伴う全身痙攣様の発作があるため、筋弛緩剤の鼻注と吸痰により対応する。皮肉にもこの吸痰行為こそ、唯一のコミュニケーション。生下時より、医療センターのNICU入院し、生後1歳の誕生日まで病院を出た事はない。生命維持ゾーンが狭く常時監視必要。酸素分圧モニターの数字と心音だけが彼の生存の証。

本発表においてはご家族の了承を頂いております

Ｋくんは三男として平成＊年５月１日にこの世に生を受けました。生まれて以来、Ｋくんは、病院のNICU（新生児集中治療室）から出た事がありません。生命維持ゾーンの狭いＫくんには常時の監視が必要なためでした。

病名、水頭症性無脳症。生まれつき大脳がない病気でした。

第三者的に観察すると、ただ、「静かに眠っているかわいらしい赤ちゃん」という表現がぴったり。意図する脳がないからです。また、しばしば高度の筋過緊張による全身痙攣様の発作があります。こうした時には、筋肉の緊張を和らげる薬を鼻管から入れて対応します。 呼吸や心臓機能に問題はありませんが、痰の量が多く、頻回の吸痰行為を必要としました。しかしあまりに静かな時には、常時装着された酸素分圧モニターの数字と心音だけが彼の生存の証です。そうでなくては、いつ異変が起きるか分からないし、小さな異変もＫくんには命をかける事態になりかねないからです。 食事は鼻管から母乳と人工乳が交互に注入されています。重要な母親との絆のエネルギー源でした。

Ｋくんの家族は優しいお父さんとお母さん。それと２人のお兄ちゃんがいます。家族の住む家と病院とは、車で１時間以上はかかる距離のため、母親のＳさんの、自宅と病院を往復しながらのハードな生活が始まりました。 そしてふと気が付くと、Ｋくんの１歳の誕生日を病院で迎える事になったのです。

この１年の間、母親の中には持ち続けた願いがありました。「Ｋも家族。家族なら、一度は家へ帰り家族で過ごしたい。」至極当然の願いでした。 しかし、あまりに医療依存度の高いＫくんには、家族の覚悟と対応するかかりつけの医療機関が必要でした。 当院は決して小児が専門ではありませんが「在宅で療養したい人」をサポートするのが当院の願いであることから、当院へ在宅ケアの依頼が入り受けることにしたのです。

Kくん（因）の在宅での経過

帰宅後1ヶ月でなんら発作がないにも拘わらず、酸素分圧が上がらない。

■Kくんは、早々入院し点滴治療が開始されたが既に敗血症となり、治療は極めて難渋した。そして僅かに2日後、7月20日、午後7時45分に愛する母親の腕の中で眠るように昇天された。

■ 享年1歳2カ月。

■ 余りに短く儚い一生であった。

■当院で関わったのは、この1カ月だけだった･･･それにも拘わらず、Kくんからは計り知れない命のプレゼントを貰ったと母はいう。

■それをまとめると5つになる（筆者）。

平成＊年６月１９日、退院。NICU の病棟ナースからは、退院を祝し卒業証書が渡されました。そして退院は主治医の先生も同乗され、無事我が家の門をくぐる事ができたのです。生まれて初めての帰宅でした。どれほどの喜びがご家族にあったことでしょう。我が家に初めて家族全員がそろったのですから・・。

しかし、帰宅してからも穏便ではありませんでした。何とか１か月を過ぎようとするころの７月１８日、「酸素分圧が低く７７～８０％で上がらない」との連絡を母親から受けました。しかし、痰もなく痙攣もない。酸素分圧以外は問題がないように見えました。抗生剤の指示を貰う為にこの状況を病院 NICU の担当医師に相談したところ、良くない状況である可能性があると指摘され、結局救急車での搬送となったのです。

この日が、Ｋくんにとって在宅最後の日となったのでした。

Ｋくんは、早々入院し点滴治療が開始されましたが既に敗血症となり、治療は極めて難渋しました。

そして僅か２日後、７月２０日、午後７時４５分に愛する母親の腕の中で眠るように昇天されたのでした。

享年１歳２カ月。余りに短く儚い一生であった・・・と思われました。

関わらせて頂いた当院のスタッフは皆この出来事に大変なショックに似た震えるような感動を体験させて頂いたと話してくれました。

（母親の手記）

息子Kが息を引き取った

「短いはかない命であったが、懸命に生き、純粋に愛すること、愛されること、生きることを実践した命だった」

「‥これが、Kと過ごした最期の夜だった‥」

「Kの生まれた星はこんなにも美しいんだよ‥」

「ぽとりぽとりと母乳が口に入る。温かくて悲しい乳白色の涙のようだった‥」

「なんという安らかな旅立ちなのだろう。悲しいのに美しい。彼は精一杯生きた。とても立派だった。」

（母の手記より）

平成＊年7月20日、息子「K」が息をひきとった。1歳2ヶ月と20日。短くはかない命であったが、懸命に生き、純粋に愛すること、愛されること、生きることを実践した尊い一生であった。

在宅になってからちょうど一ヵ月後、見た目はいつもと変わらないのだが酸素分圧が上がらない。とても楽そうなのでセンサーが壊れているのかと交換したくらいだ。

7月19日夜には39度という、Kでは見たこともない高熱を発熱した。夜中じゅう、アイスノンを交換し、ほとんど寝ることなく過ごした。これがKと過ごした最後の夜だった。

20日、心臓外科の先生にも来ていただいて血管を探していた途中で呼吸状態が悪化した。私は死が近づいている事を直感した。「したいことを全てしてあげなくては。」まず、閉めてあったブラインドを開けた。やさしくて温かい午後の光が差し込んできた。「Kちゃんがんばって。大丈夫。がんばれ。」そういい続けながらも、なぜか涙がでてしまう。死んでしまうことを認めたくない。必死だった。そうこうしているうちに日が傾き始めた。真っ赤とも黄金ともつかないあまりに荘厳な夕焼けを見て、「天からお迎えがきた。」と思った。「Kが生まれた星は、こんなにも美しいんだよ。」と、抱きながら夕日を見せた。最後の時今までどうしてもできなかった、そしてどうしてもしたかった、口での直接授乳をさせた。

Kの唇は少し冷たくなっていたが、ぽとりぽとりと母乳が口に入る。温かくて悲しい乳白色の涙のようだった。「甘いでしょう？」

呼吸停止直前に、ずっと目を閉じていたKが、目をしっかりと開き、私をじーっとみつめた。とても力強く、意思のある目で。「ママの顔を忘れないように覚えておくよ・・・。」というように。そしてゆっくり、静かに目を閉じた。午後7時45分。なんという安らかな旅立ちなのだろう。悲しいのに美しい。彼は精一杯生きた。とても立派だった。

Kが教えてくれた５つの事（母の手記より）

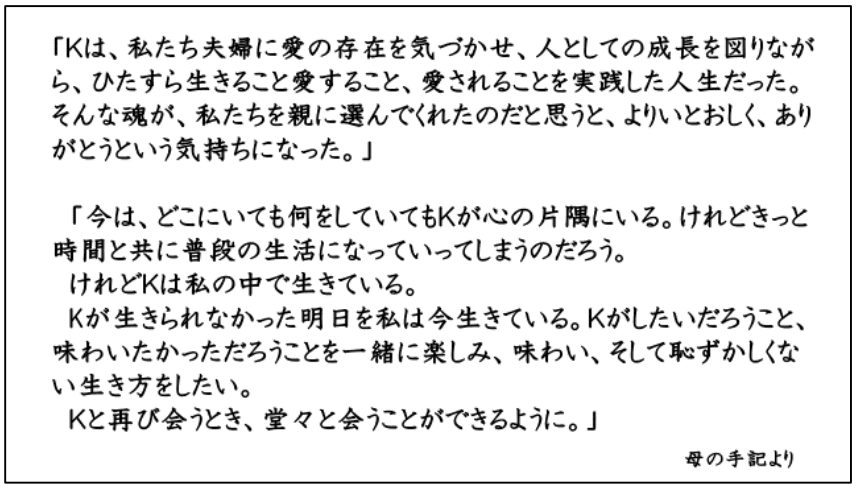
１、目に見えているもので判断してはいけない。心の目で見ることで見えてくるものがあるということ。

２、人生には目的や役割があるということ。

３、「死」は単なる恐怖ではない、無になるのではないということ。

４、絶望のどん底でおぼれそうな時でも、ひとすじの希望の光は必ずある。それは前を向いて進もうとするものだけが気づくことができるということ。

５、決して一人ではない。必ず私を見守ってくださっている目に見えない力は存在するということ。


「Kは、私たち夫婦に愛の存在を気づかせ、人としての成長を図りながら、ひたすら生きること愛すること、愛されることを実践した人生だった。そんな魂が、私たちを親に選んでくれたのだと思うと、よりいとおしく、ありがとうという気持ちになった。」

「今は、どこにいても何をしていてもKが心の片隅にいる。けれどきっと時間と共に普段の生活になっていってしまうのだろう。
けれどKは私の中で生きている。
Kが生きられなかった明日を私は今生きている。Kがしたいだろうこと、味わいたかっただろうことを一緒に楽しみ、味わい、そして恥ずかしくない生き方をしたい。
Kと再び会うとき、堂々と会うことができるように。」

母の手記より

「K は、私たち夫婦に愛の存在を気づかせ、人としての成長を図りながら、ひたすら生きること愛すること、愛されることを実践した人生だった。そんな魂が、私たちを親に選んでくれたのだと思うと、よりいとおしく、ありがとうという気持ちになった。」

「**今は、どこにいても何をしていてもＫが心の片隅にいる。**けれどきっと時間と共に普段の生活になっていってしまうのだろう。けれど**Ｋは私の中で生きている。**Ｋが生きられなかった明日を私は今生きている。**Ｋがしたいだろうこと、味わいたかっただろうことを一緒に楽しみ、味わい、そして恥ずかしくない生き方をしたい。**Ｋと再び会うとき、堂々と会うことができるように。」（以上、母の手記より）

＊＊

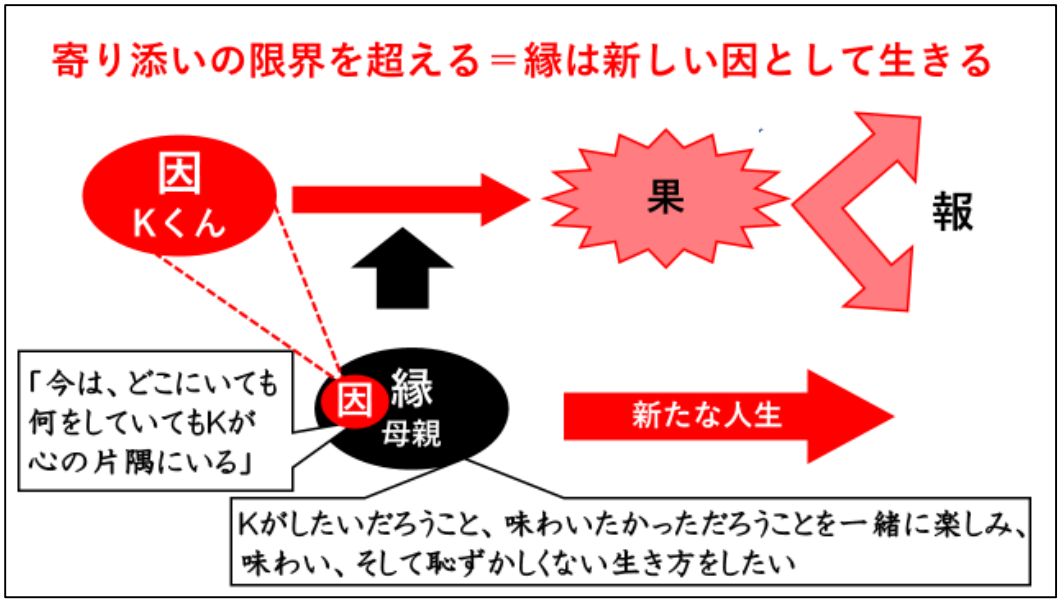
Ｋくんは、関わった皆にとっての、鏡の様な存在でした。彼の存在自体が、ただある事だけで何も請求はしませんでした。それにも拘らず、在宅医療を実践する中で彼ほど雄弁に語りかけてくる存在はありませんでした。それは、自問自答だったのかもしれません。しかし、Ｋくんを前に、誤魔化しはききませんでした。

「貴方は一生懸命生きていますか？」これが彼からの私が貰った命のメッセージです。

Ｋくんありがとう。そしてご苦労様でした。

きっといつかまた逢いましょう。

寄り添いの限界を超える＝新しい因となる



さあ皆さん如何でしょうか？

縁であるお母さんは、障害を持ったＫくんに代わる事はできません。これは厳然とＫくんの運命であり、それはＫくんしか担えないのです。厳しい法則です。しかし、だからこそ、お母さんはもっと深くＫくんに寄り添おうとします。しかし、とうとうＫくんとのお別れの時がやってきます。そして、大事なことはその後です。母の手記には、「**今は、どこにいても何をしていてもＫが心の片隅にいる。Ｋは私の中で生きている**」と言います。そうです、とうとうお母さんはＫくんと一つになったのです。そして、Ｋくんと合体したお母さんは、「**Ｋがしたいだろうこと、味わいたかっただろうことを一緒に楽しみ、味わい、そして恥ずかしくない生き方をしたい**」と、これからの生き方を宣言されました。何と素晴らしい物語でしょうか。

私は、「縁は因にはなれないという寄り添いの限界はある。しかし、縁は深く寄り添う事によって、因と一つになり、合体した全く新しい因として、新しい人生を作り出すことができる」と考察します。縁である母は以前の母ではないのです。

きっと人間とは、こうして自ら因として経験できる人生を超えて、愛する人（家族）のために、深く深く寄り添った分、その因が統合され一つになり、新しい因となり生きてゆくことで、以前の縁の限界を超えることができるのです。

結　語

1、因縁果報で世界は動いている。
2、われわれ医療者は縁として関わり、その寄り添い方次第では因である患者の生き方を朱にも黒にも染めてゆくものである。
3、縁としての寄り添いの限界は厳然とある。それは、「縁は決して因には代われない」ということ。代ろうとすると苦しみが生じる。（あなたはがん患者に代れない）
4、しかし、縁はこの「寄り添いの限界を超える」事ができる。それは、Ｋ君の事例からＫ（因）の生き方に深く寄り添い、自ら（母・縁）の人生に因の生き方を統合し生きようと決意した時、自ら（縁）は「新しい因となり生き始める」事ができると思われた。

（追伸）

私ごとで恐縮ですが、昨年、還暦を迎え赤いちゃんちゃんこを頂きました。そして、昨年の８月には初孫が誕生し、名実ともにジージになりました。伴って、風体も白髪が増え、薄くなり、視力、記憶力の低下や腰痛、膝痛など体力的な劣化が順調に起こっています。昔はこれほど悪くはなかったのですが、摂理には叶いません。

孫が誕生した昨年でしたが、思えば６０年前も私自身が誕生しました。そして、６０年という時を経て、子から孫へバトンが渡っていくという、この平凡がとても嬉しく感動しています。しかし、ちょっと不安になりました。混乱した世相や環境経済問題、人心の荒廃を見るにつけ、果たして、孫はこれから６０年後を、今の私の様に還暦を迎え、この世界で笑って喜んで孫を見ることができるのだろうか？と思っています。

平和な社会は、思いやりある社会だと言います。まさに今回のテーマとした「寄り添いのある社会」こそが望まれる社会だと思います。

６０年後、孫の世代と言わず、明日から我々の事として目の前の出来事に心から「寄り添い」まずは自分自身を幸せにしてあげたいものです。きっとそれは連鎖し因と縁が双方成長し統合し更に大きな因となり縁となり進化してゆくと思うのです。子々孫々へ、この命の連鎖が、そして素晴らしい因縁の連鎖が続きます事を年初に深く祈念したく思います。

Ｋくんのように、ただあるだけで家族を進化させる力を我々は持っているのだから。